

雙魚堂日載

卷三

明治四十四年三月下旬起筆
瀨西出張中

特別
14
1919
252



渡辺の日記

明治四十四年三月廿一日 越中

○三月廿二日 蜀山南畝のあけぼのつくと及たを
 リ出すとくうを或る人二三つあるを眺めくまう
 ありちり崎るねりの日霞田のほろレサノツトの
 ありちり字をいひくまの外にあり人のきき
 和漢の文書三四冊は蜀山のきき(蜀山)のあけ
 ねを江とのきき眺るくまのきき(海)のきき
 谷文書の(紙)南畝の印捺しらすきき
 ちり秋のきき(紙)のきき(紙)のきき(紙)のきき(紙)

蜀山南畝

三月廿二日... 演劇革新の第一聲

演劇革新の第一聲

演劇革新の第一聲... 演劇革新の第一聲... 演劇革新の第一聲...

其 一 坪内逍遙

坪内逍遙... 演劇革新の第一聲... 演劇革新の第一聲...



再燃

演劇革新の第一聲... 演劇革新の第一聲... 演劇革新の第一聲...

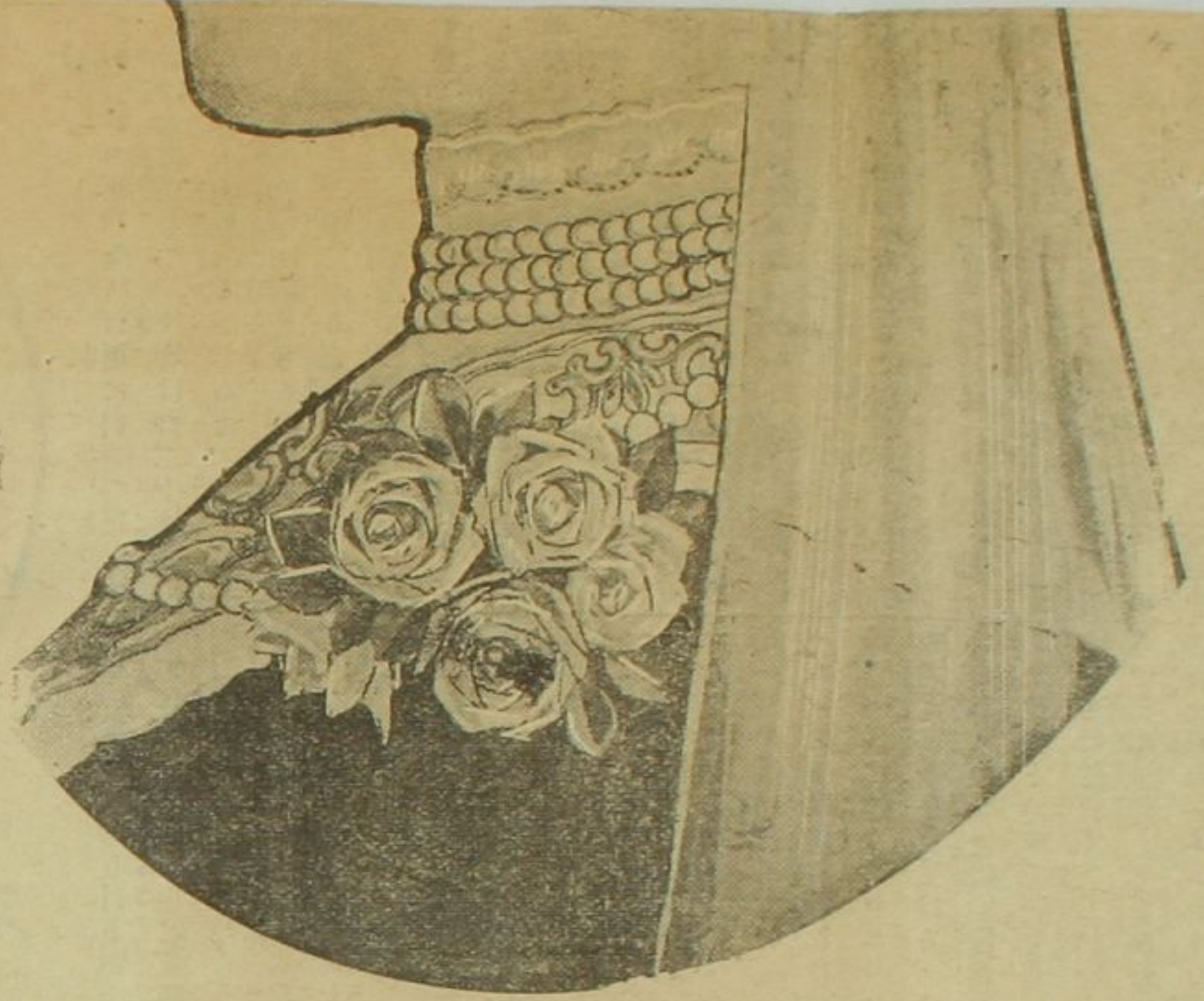
其 二 島村抱月

島村抱月... 演劇革新の第一聲... 演劇革新の第一聲...

其 四 市島謙吉

市島謙吉... 演劇革新の第一聲... 演劇革新の第一聲...

演劇革新の第一聲... 演劇革新の第一聲... 演劇革新の第一聲...



せら

の
おしりには
方に

せられつゝあり
フおしりには
洗化粧は
共に美醜あり

日本には

齒磨に

クラ

日本には

白粉に

クラ

日本には

洗粉に

クラブ洗粉

伯の賦政を以て其所のキミを敷くは
 年夫と傳ふを以て其所のキミを敷くは
 拂ふ所の借金を利ふを其所の同士の
 十葉用の借金を利ふを其所の同士の

と願ひあるは湯を乾かすなりこゝろよく乾かすは又
時由あるは湯を乾かすなりこゝろよく乾かすは又

おしり以は

方に

せられつゝあり

フおしり以の

消化粧は

共に美醜麗あり

クラ

日本には

洗粉あらいひに

クラブ洗粉あらいひ

的の財由あるは湯を乾かすなりこゝろよく乾かすは又
年夫んと情をまをゆへる長らうしそをまをゆへる
拂ふ所の情をまをゆへる長らうしそをまをゆへる
十葉田の情をまをゆへる長らうしそをまをゆへる
二十葉田の情をまをゆへる長らうしそをまをゆへる
財政経の情をまをゆへる長らうしそをまをゆへる
大の寄附をまをゆへる長らうしそをまをゆへる
夫婦の情をまをゆへる長らうしそをまをゆへる
まをゆへる長らうしそをまをゆへる
こゝろよく乾かすは又

○三月二十一日物部多麻呂の國西行の途下らる此
 行時年より川つきを扱しぬまゝとしち改漸
 古より其身を尊卑人ぬ也此年既に入
 ち。方面と海を舟くしと夫人を~~御~~多麻呂の
 領地を有とす~~此~~結果とる~~く~~を~~御~~新
 し先の大城の~~つ~~先~~に~~ち~~を~~部~~に~~入~~る~~等
 とあり~~此~~寺~~に~~し~~寄~~附と~~得~~ん~~と~~也~~而~~も
 此寺と現下兄其大帥の~~を~~志~~を~~持~~て~~て
 部部の行ある~~を~~集~~集~~東~~を~~移~~移~~寺~~も~~其~~日~~十八
 日~~に~~し~~寺~~の~~を~~遷~~遷~~を~~名~~と~~と~~と~~と~~ん~~と~~準

体言中リける地をふしと心とくし生るる時
を并るるこしくするもあふより大なる功を
此のふたりのこにむす集のよきものなる
献するを採るまこと一りのゆるあゆむと并るる
ふあふらんとの採る一花のよきを採るる
く難し^①此の味を好むるを向うも勸化の端
をいふも^②おろそかにするの十八の旨を
りを領せと説く、か論未比決をいふ、友人はあつ
ふんをせよえをいふ、早稲ゆと早稲香具あふ
指も天下第一也早稲ゆと早稲香具のうまいをいふ
といふ也と

○三月廿三日 〆 龍京初着少田を偷ちて移るを
とゆふ京初着より余り餘り地味ありては此家をゆふ
とゆふ書ありて是の地をゆふるなり二三日のち、
又も地味ゆふるものともな家の名をあらわす
一書とてゆふるものも中なる所あり

山田方谷 従来とて一石 印接あり

尾原二海 二内一里とて一石 一書あり

西山杜南 界域に細きしとて一石 三葉

古賀村 漢文大略

草、号師 相模の村三葉

明洪朱社金交山外

賴山物産の序 徳島の題名山陽草

通然画 意摩子 陸徳の巻をうりて

即此の流らるる

聊公揚一草 兼おめ津果揚子

江中道至今流ある者

大会考帖

大会考帖を考ふるもの也 是るを以て考天皇

の故説より其の作をす即ち考す
記す

不願守唯喫從前書 四巻何回天闕上

以説事と生る 孝林匡俗金口口

大会の依りて同じ物名のゆゑんとして
米別記の載をなして考ふるに
招く

御書唯しと事林下事見よあ心 空行任流
説也者 耀也者

皆川淇園

武清松原と園

半切の幅を下部に沢や一の景
鳥打の畫しらすと流つと心やの
邊れとるふけとて

外に流つとてのふあをふふふふ

小嶋のこをふふふを畫つとふふふの

流つと

あらららけれれれれれれれれ

舟の聲

高野 小幡

大洲の此物 甚を書くと 點甚ぬ
をまふ

外に未少人の一幅お阿孫と信ある鯉魚の双幅が
又ささささのまふうしし七一二さるるん白道あさふ

佛像話を聞かして又聞きし時を稿しあんなる

此家の花うきと橋寺の竹くさるる松陰塗りの

桐葉ひの列祖帳とて皆物終ふ程りあり

一見と得るうしとて高野城也列祖帳とのき南

條又確の志決を那んらんふたふぬふ又列

祖帳中の一縁をコロタテテアツル所しきよふ一縁
 を終るこころも深中なるにねてる料とてし

先德餘香

南條文雄集

集中ノ文ト題辭トハ平野履信君所藏ノ列祖帖ヨ
 リ寫シ出ダシテ寄セラレタルモノナリ、帖ハ長
 崎崇福寺ニ在リシモノト云フ、去年夏安居中余
 之ヲ一見ス、頗ル珍品ナリ、序ト跋トノ壬寅ハ
 寛文二年ナリ、佛祖圖ノ筆者逸然ハ崇福寺ノ僧
 ナリ、其落款ニハ辛丑正陽月八日トアリ即チ寛
 文元年ナリ而シテ題辭ハ天和元年辛酉春ト二年
 壬戌夏トニ書セシモノナレバ實ニ寛文元年辛丑
 ヨリ天和二年壬戌ニ到ル二十一年間ニ作り出ダ
 セシモノナルガ如シ作者ノ苦心想フベシ。
 西天四七。眼橫鼻直。東土二三。寐語喃喃。惑亂
 天下。無有二期。正眼看來。電影空花。奚足爲
 珍。浩其本源。蓋因靈山老子。關頭不密。聊露
 枝花。以致頭陀嘔破。無端承虛接响。以訛傳
 訛。相襲成風。直至于今。無入載斷。深可慨
 也。那更依樣畫貓兒。持來示余致問。忤心妄
 發。未免呵叱。糊塗一公。累及東土西天。諸
 老面門。愈增醜態。罪我奚辭。雖然。如是返
 恰雲門老漢。一捧打殺餒狗子。吃。貴圖天下太平。
 掃潔源頭。知恩有地。余之逗漏。奚足云爲。但
 几智者。達觀斯圖。頓悟其本。則圖明直赫。靜
 潔無餘。樂莫大焉。以遂丈夫之志。絃不隨波
 逐浪。他日拈條白棒。打殺雲門。爲釋迦老子。
 雪屈一番。那保佛日重光。道風益熾。列祖常寐光
 中。拍掌呵呵。則不孤按圖得寫之功也。
 壬寅年陽月望後
 臨濟正傳三十二世
 黃藥隱元琦謹序

- 頂門浮肉髻 辨捷不思議
- 第八中禪祖 提伽國化被
- 第九祖伏駄密多尊者 父母非我親 諸佛非我道 親佛即心光 超然受祖教
- 第十祖脅尊者 夢象馱珠至 古稀未席眠 憩於金地上 廣度衆無邊
- 第十一祖富那夜奢尊者 得法脇尊者 遊行波奈國 闍揚解木義 賢士深欽服
- 第十二祖馬鳴尊者 法輪妙轉處 大降一切魔 親爲宣性海 直令心融和
- 第十三祖迦毘摩羅尊者 王臣家不入 直詣於龍拊(樹歟) 知彼默思惟 忻然深指示
- 第十四祖龍樹尊者 法輪圓滿相 表體含虛空 說法非聲色 衆悟仰真風
- 第十五祖迦那提婆尊者 以針投鉢水 契會月輪相 復自執長幡 摧降外道種
- 第十六祖羅睺羅尊者 微耐無我法 破彼難提士 舉鉢取香飯 惟師共食爾
- 第十七祖僧伽難提尊者 不樂王宮裏 惟居石窟中 既傳多祖法 復付百歲童
- 第十八祖伽耶奢多尊者 母娠七日誕 圓鑑以常持 遊遇提尊者 祖燈親續嗣
- 第十九祖鳩摩羅多尊者 法要善能說 爲天大導師 時當以繼祖 遂降於月氏
- 第二十祖闍夜多尊者 淵冲大智慧 化導衆無碍 辨伏遍頭陀 玄風令契向
- 第二十一祖婆修盤頭尊者 歷切大精進 智通無漏行

聖人來顯迹 天笠更王供
 出入不居蘊 轉經萬倍重
 第二十八祖菩提達磨大師
 雜篇 先德餘香

釋尊拈華。流露香光於滿地。頭陀微笑豁開法眼。以當機。從此接響承虛。直得遺殃萬古。以

聯句を心く時の原行儀をのりてしるる儀
 おきりの免りあををみかへりてしるる儀

なるもの難むの首端の品好信者申一様申ふ
 聯句と題し録々の目も申せやふ中略略也
 ありといふ抄るべきもの而もさるるあり
 此書より海ひ年花園者荒干と云ふらし
 一の例の政體をいふと出くる証書の二三を
 字美くししものなり唐代の言解と云ふ
 なる大寺の形を説くを異とする所なき
 一巻を撰ししと端々所を米某の内巻
 本稿(神文のなる抄也)を細書ししと云ふ
 一、たる言ししものあり米某の内巻

を録るべきもの細書ししと云ふ
 此の宋版聖教序と炳卿傳と云ふと
 と大抵の抄を撰削中と云ふと云ふ
 二三巻を示さるものあり(聖教序と
 とき字の太さをいふ)を宋版と云ふ
 是くはもりうくの用方をいふ
 改々々々或しと云ふ(典則二十冊むら
 リの古也)と物部と云ふ内容の文をいふ
 するといふと云ふと云ふと云ふ支那と云ふ
 觀のいふと云ふと云ふのあり

順序立ちたる會式

大混雑も漸く下火
本派大遠忌八日目の二十三日は朝來薄曇にて少雨の氣遣はるものあり、殊に團參者も絶頂を越ゆる人浴者よりも出發者倍以上あるより前日來の大混雑も餘程下火となれる觀あり、二十三日は開日に午前中の歸敬式は六千二百人、午後は五千八百人合計一萬二千の多數に達し御達、直經拜禮等も五萬人を下り人數より云へば廿一日には及ばざるも尚ほ盛況たるを失はざるが順序既に整頓せるため其混雑は日に付かざる有様なり

▲武子夫人の訓示 廿三日

午後四時より佛教婦人會本部長九條武子夫人は次長保上嶺子と共に全国各地佛教婦人會々長副會長、幹事等二百餘名を佛教大學講堂に召集し故總裁光顔院太子の遺訓につき感篤なる訓示をなしたり

▲百七十里を徒歩 廿三日

京都を出發せる參詣者中に大分縣西國東郡高田町光園寺門徒八重垣わい(一)といふ老婆あり、今回の大遠忌に參詣せんと思ひ立ちしも家貧しくて中々團參に加入し難けれ、此の勝縁を外しては、少し許りの金子を懐中して去月十日郷里を遠征し道々食ふや食はずに露宿同様の

▲十六貫の大蠟燭

團參者中富山縣高岡市大越よ、岡原ちよ、杉本をの三女主催となり有志の蠟金を募り同地蠟燭師室澤理助に調製を托したる大蠟燭は重量十六貫、丈四尺、五寸徑一尺二寸あり、金地に菊模様の極彩色ある頗る見事なるものなりといふが此等大蠟燭の志納は古來其例なきにあらず、殊に一度は他宗のもの、嫉妬より火

▲示寂僧侶の葬儀

願寺参りに死去せし團體參詣者北海道道真田清助、福岡縣青山かくの葬儀は、づれも本山費を以て歸郷に營みしが尙僧侶の示寂者たる富山縣密岡一天師に對しては法主より特に通照院なる院號を下附し昨朝涼風會館の葬儀には同國の法中及び團參者多數會葬したり

▲豫想外の不景氣

遠征が始まつてから今日までに参つた團參は二十三萬五千人だつたが隨意参

四十萬

人位わの人が入浴し大抵一日に七八萬の人が西六條附近に陣取つて参詣せぬ時にはお土産の買物に出掛け七條通をばじめ御前通、花屋町などの戸毎には本山旗に本山紋の這入つた紅提灯を出し珠數や打敷など様々の佛具はウツと言ふ程店頭に積まれ其の上お上りさん達は澤山通つて何所を眺めても景氣の良いや有様だつたが扱て聞て見ると商賈は一向に駄目だつたらし

不景氣

人が豫想したより一向不景氣だつたといふのだ、早い話しが活動寫眞一つでも遠征を目前にて四ヶ所も出來てゐるが觀覽者は肝腎のお上りさんになつて市中の者に多いといふ有様で佛具店なんぞでも物によりけりで四五十錢の物も賣れるが大抵は二十錢か三十錢が關の山、銀籠屋へ這入つても五人で三杯の饅頭を注文して分配して喰ふ者も少からずあるからね、豫想以外に不景氣風を吹かすのも無理

京都の出来やの所帯



國書刊行會

及此の如く身命の如き人の作らざる佛像と云
の如くともいふ所なる美能也此の如く一つを精と
し念を入るるに如くはあつてか又人貴くけん心
の元来のことともも善悪あひある淨心あること
え法言實と見え差支るるう又その如く
るく佛教の如くはの如くの中の人多しし佛像
に如くはあつての如くはあつてはあつてはあつて
又の人の如くはあつてはあつてはあつてはあつて
るく一概に佛像とせし原はるる如く形式を
守らざる如くはあつてはあつてはあつてはあつて

○三月廿四日あるる平也願に終家、再訪の
ろくろの流り内、五岳の流出が五岳と願に
如くはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
所、願に終家とせし如くはあつてはあつてはあつて
如くはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
と其の如くはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
使つて撰抄をすとの境界ひらひ、自身如くはあつて
如くはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
分善支那の如くはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて
九の如くはあつてはあつてはあつてはあつてはあつてはあつて

白うくまの男ひあつてもまていぬもておぼひ
うぬ方うんともこのは格方う之れをなまさ
使君の口にとりてとる事をもあるとこのて元月
やこえくとも使君の御つはしうをち人ひあること
かそくしきぬ遇いといとまひ格方ともしよひ
と目合とち更と酒を飲る大いぬ二件てあはれ
気をもあつてくしとを音を吐きこつて格方共
意を願し居ると思へて雨ふると逃げこることあ
りて又東の前の流るう丸か出錦のちの回り
中へまをぬかへた、五つを流るうそのうと流

んと命をもたしあつたといふは流の守りぬん
ら頼まんとて画をこくことたき形をともあつ
くこと此の傳説をなまき又んは流をといひし
あつてあつて白くおり五つの方、まをのちそん
とて流るうしよのりまか(画)うまき(心)とい
あを流るの流可と得て出錦中の石ををぬ
しは画中の流るの道や、こつ所もあつたあ
七よく出まぬとてあつて格方と格方とあつ
流るも流る、願は又まつち格方と格方とあつ
あつてあつてうんともあつて格方と格方とあつ

先法家志を伯仲しの辨る者家系を
首書と二書の中一頁に附けあると此の左に依
つて本一と漢書帝の考の附けあること本
二書と後漢車騎の考の附けあること本
のことも目録にあり元來の用を附の道燦の
附をも示さんといふは後原松陰の
附之附九冊を附し示さんといふ

○来十月廿日を卜し懐徳を記念祭を行ふの爲
あり女の致意ありと祝詞を寄せ奉る故古
書懐徳書の起原を略叙す曰く

近世奇に於ける我が大政唯一の奇校とすし懐
徳を川中井秋丸尾先生と大坂の商人中村陸
峰(三星屋式左二門)と中永芳春(道明寺心
夫左妻)と長崎克之(船橋尾四郎左二門)吉
田盈枝(備前尾夫兵衛)山中宗古(鴻池
又四郎)の五有志と謀り同志を糾合し
三宅石庵先生を聘して尾山寄町一丁目北
側(今其の跡を今橋町)四丁目北側(八町
五丁目)より一時久喜保九年也同十一
年幕府の官許を得てついで大坂支那

所とも稱し石高先生歿後ハ松尾高先生等
之と云ふ也 丑井甘園海先生との報を親身
より前年二十年 尋きて松尾高の子竹
山(増徳申す可也) 後軒(形武館 藤堂也)
先生慨然してして大志ありて之を海内
に稱し子孫お継ぎして世に以て之を
此の階とも云ふ也

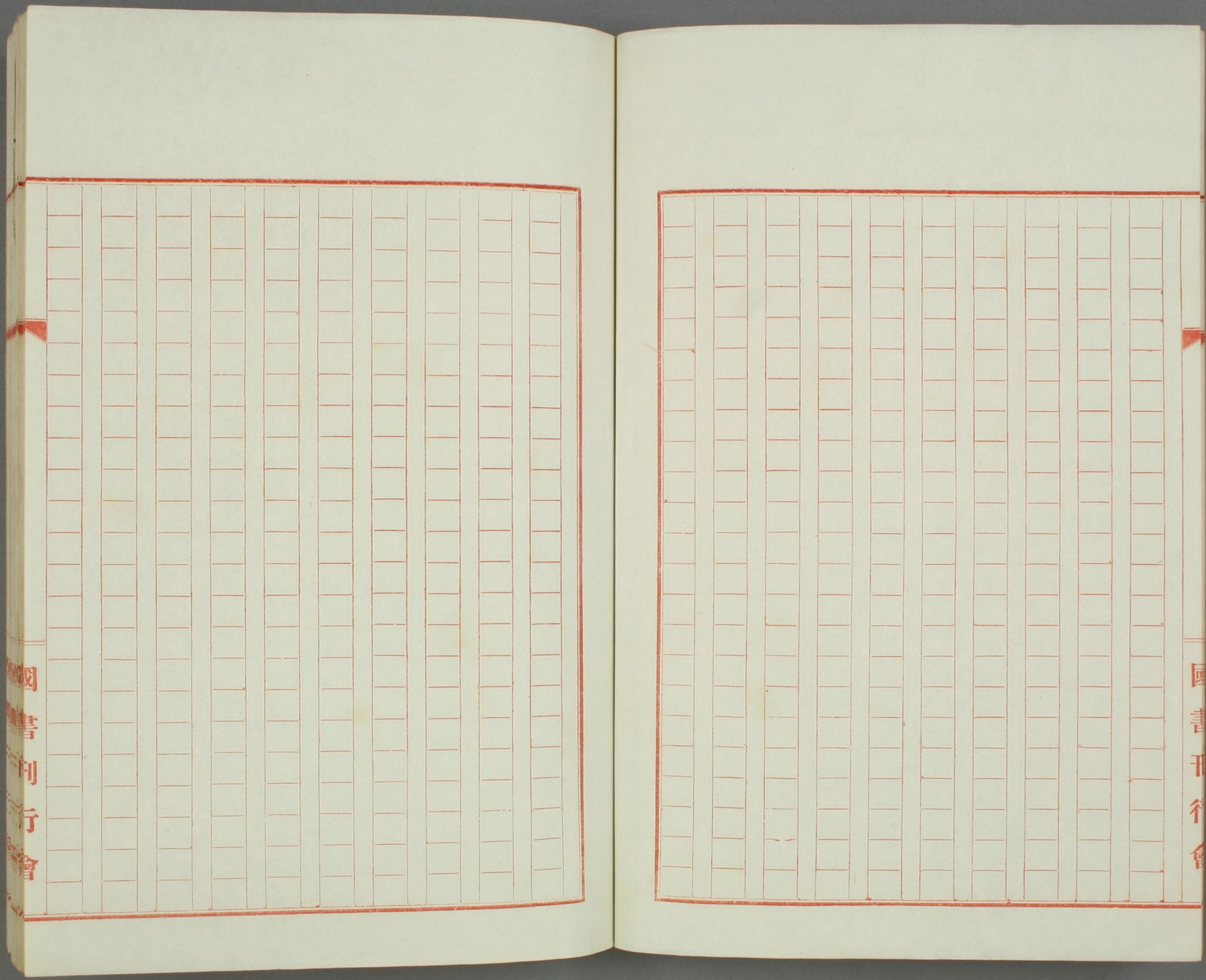
○此の五人坂ハ丑峰 昭市 楷方 の剛剣雲
の碑本一幅を存すもと 預戒の川上氏の所
知に係り、此ハ昭市の祭奠を平宗に託

此の奉安も今五峰に勅め之れを陳列せし
む文中に出雲崎 集寺に云ふ所の墓なること
く此の人も同所ハ雲々の首をたす守りしと
云ふ此の碑も出雲崎に建つて心づきしを建
てて云ふなり、何れも此の一幅を存するに
おき、返攝の儀も碑文を騰寫せしむるに
よる 昭市の名を御銘にすなり、之を以てし
敬供を雲んこし、ぬふとも、此の^入日文恐ら
く昭市の名中ハ漏ん居らん、是れ保存の
要ありし

Blank writing area with red horizontal lines.

Vertical text on the left edge of the page, possibly bleed-through or a separate column.

文	外	十	一	本	林	小	月
人	日	後	也	年	歲	大	行
之	新	此	文	十	年	大	一
無	歌	歌	三	十	年	大	一
越	歌	歌	三	十	年	大	一
越	歌	歌	三	十	年	大	一



國
書
刊
行
會

國
書
刊
行
會

本に照楊を磨泐若言蓋不之者一切闕而不
出臨幸之儀宜也此尾畧延祐五年九月
臨松古延祐三年為新井子士六年約清南由
後二年支年六十九(後略)

此世の本歴をくし、但し着體直する心と云
すをぬらうとくき不ををえんがめし難しと
是も兼力能も柔軟入又ちあやと思つる
ふ、
口々丸(三月廿二日)の大阪日報を弄一三交中央に

近代日本

早大の礎市島謙吉

▲市島家は新潟の財産家で、謙吉君も少からぬ資産を有しもめたが、
其一種の公其僻は、自家の米倉を顧ないので、この頃は餘程損をした
らしい。
▲彼は古い新聞經營者であり、政治家なり、併せてまた教育家である
教育家としても講壇に立つの辯士でなくて、圖書館や、事務に隠れ、
陰に廻つて、學校の爲めに盡す様の下の舞踊家である。
▲これは、彼の半生の努力をつくしつゝある早稻田大學の今日の成長
の歴史は、其表面の英雄、大隈、高田、坪内、天野等によつて點彩さ
れてゐるが、この隠れたる市島の名は二幹事として世間ではほとんど認めない。
▲人は、伯大隈や高田學長が懸河の辯を揮つて、私立大學の功能を述べ立て、
それが爲めに早稻田の賽銭箱へは、小判が落込むやうに思つてゐるが、そのか
げに汲々として、草座三十の革囊を提げて募金の役目を勉めつゝある彼の眞摯
にして熱心なる心掛を知るものはない。
▲坪内博士は、學者たるものが、學校の費金を集めに廻つたり、他人に勸財す
る必要が何處にある、我輩は自ら守ることを以て、職務に忠にして、併せて
早稻田大學に忠なる所以と信ずるこの自信を有してゐると、市島が、我輩はま
た坪内、浮田の如き尊敬すべき學者をして後顧の憂なからしむる爲資金の充實
につとめねばならぬとの主張を實行せる、双々相對して、早大の誇とするに足る。
▲彼等、早大理工科設置の問題を提へて來つて、當地にあり、吾人は世人が彼
の熱心を買ふの俵骨あるを信じて疑はず。

近代日本の人樹中余の記すを掲げらるるを以て

人を以て守りて
ふんばるるを以て
のうとんが末
をんばるるを以て
みす心おむき
このもそふ日
報と若紙式抄
也

又々此の大坂期りのり暗附録に親我言第と
 云ふに流るる見も 見え北の川合守の親然
 乞の列者の主なる者う字をふとらうと出て、

此は略し木草のふしに因縁の事なり...
 一、明徳元年、東山、親我言、北の川合守、
 木草のふしに因縁の事なり...
 此は略し木草のふしに因縁の事なり...
 一、明徳元年、東山、親我言、北の川合守、
 木草のふしに因縁の事なり...
 此は略し木草のふしに因縁の事なり...

そのりいゝと見えも自今より此の事
 附これ中林村の大阪七載のてん
 一、此れしとあるがらんひある 一、
 まいに親我言の事むとるが大阪
 酒のを世もしとあるが大阪
 一寸橋の事むとるが大阪
 別備中、勝る目を惹いと云ふ
 同じ附録、内河洲南の方論を掲出す
 ありし、こゝをんか今を有るぬ
 四十三年三月十日、大阪改定

北派の書論

文學博士 内藤 湖南

南朝の近代即ち道光頃からして、書に北派と云ふものが唱へられて、殊に北派の書が漸く流行し掛けて来た。此の北派の書を唱へ出した人は多く學問の方から言ふと所謂漢學派(宋學)に對するに屬する人であつて、其學問も既に當時の流行に乗じて、全盛を極めて居つた所に、又極めて人氣に投じて居る方法に依つて、書の方の議論にまで及ぼして来たから、唱へ始められてから日が淺いにも拘はらず、頗る流行の度が早い、其の中盛に書論を唱へた人は阮元であつて、之には南北書派論(北碑南帖論)と云ふ論文があつて、北派の書論の根據のやうになつて居る、それから又包世臣は、藝舟餘楫と云ふ本を書き最近では康有爲が更に廣藝舟餘楫を書いて、益々北派の勢を張つて居る、是で見ると、略其の書法の一變と云ふものは僅に百年此方のごとであるやうに見ゆるけれども、其の兆候は明の中頭當りからして既に見ゆるのである、明の初めまでは書法は相傳を重んじて、それが漸く衰へ、魏の鐘繇以來晉の衛夫人、王

羲之を経て、其の流れを受けた筆法は明の初めまで絶えず相續して居るのであると云ふ議論がある、明初の解縉と云ふ人が此の傳授系統を論じて居る、此の筆法の傳授と云ふものは日本でも入木道の傳授があるやうなもので、必ずしも確實なことでない、併しながら又全く根據のないことでもない、姑く其の系統論に依らずして、單に局外から見ても、古來書法には幾多の變化はあるけれども、元の趙子昂、明の文徵明などに至るまでは自から一定の法があつて、明の祝允明なぞ以來の文字とは自ら異なる點がある、此の相異の點を言表はすのは中々困難であるけれども、假りに董其昌の語を借りて言ふと、一を作意と言ふべく、一を率意と云ふべきものである、即ち舊來の書法は作意の書法にして、さうして明中葉以後の書法は率意の書法である、云ふことが出来る、作意の書法は熟を貴ぶ、率意の書法は生を貴ぶ、董其昌も自ら其の書を評して、自分の書と趙子昂の之比べると云ふと、各長短がある、趙の書は熟するに依つて俗態を得て居る、我が書は生に依つて秀色を得て居る、趙の書は作意せざるごとく、我が書は往々率意ありと言つて居る、之が餘程能く時代の傾向を言

表はして居る、即ち六朝以來唐宋元明までの書と云ふものは古來相傳の法があつて、其の法に合ふやうに、努めて古法を學ぶことを主としたのであつて、それが即ち作意で、其の作意に依つて熟境に入ることを中心として居る、然るに祝允明以後は如何に人が古法を學んでも、各其人其の人の天然の癖即ち個性がある、勿論作意の書法が盛行はれて居る唐宋の時代でも、即ち此の天然の癖即ち個性に依つて最後に各一家を成す次第であるが併し古には努めて其の癖を没却してさうして古來の法に近かんとしたのに、今度はそれに反して其の自然に現れて來る所の傾向を利用し即ち又筆に依つて自然に生じて來る所の情力を利用して、さうして各の特色を發揮することを主として居る、之が即ち率意の書法である、

ある、併し時々率意の筆法を用ひる、それで其の率意の處が即ち一種の妙處になるのであつて、それは董其昌の晩年の書に於て殊に著しく現れて居る、此傾向は清朝になつて益々盛になつて來て、清初の人には矢張り董其昌と同じやうに全く作意の書法を捨て、居らぬけれども、其中には餘程率意の勝つて居る人がある、即ち王鐸なぞのやうなものは率意の勝つたんであつて、又作意の書を主として其の間に微かに率意の影を認めるのは傅山なぞの如きものである、之が康熙、雍正、乾隆頃になつて、此の二つの傾きが又益々明かになつて來て居る、康熙帝が董其昌の書を好んだのは必ずしも其の率意の點を好んだのではなくして、寧ろ作意の點を好んだのかも知れない、それで其の方から出た一派は董其昌が専ら力を得た所の根據にまで遡つて米芾の書を學ぶ風が出て來て居る、即ち王夢樓、梁山舟なぞのやうな人は其の最も著しいものであつて、有名な張得天などもせうか云へば其の派に屬する、率意の書風を大成したのは即ち劉石巷であつて、此の人は専ら董其昌の率意の點に注意して、さうして而も生境に於て其の妙所を發揮せすして、却て熟境に於て大成せんと試

みて、成功したのである、之が一種の着眼點であつて、率意派からして熟境に入つたのである、
兎に角、さういふ二つの派が既に明かに分れて居つて、さうして率意派が年と共に増長して居つた、所が近頃康有爲なども評するやうに張得天、劉石巷と云ふものは帖學の大敵であると言つて居るが、謂ひ古來法帖に依つて字を稽古する、即ち近代の語で言へば南派の書法と云ふものは劉石巷に至つては殆ど大成したのであつて、それより外に一頭地を出すべからず、地が無くならぬと言つて宜しい、之が即ち近來の北派の書法を唱出した重なる原因である、
それで北派の書法と云ふものは最近に現れたやうであるけれども、其の系統を論ずると云ふと即ち率意派の書法に原因を

した居つて、劉石巷と劉の遺を述べて、其の生後にして餘處を求むる方に傾いて來たのである、
北派の書法を唱出すのは南北朝の時代の北朝の書で、殊に北齊の頃、南方からして王羲之の親子の書が傳はつて來ない以前の極めて素朴な書法を學ぶのであるが、是等の書は支那に於ては昔にも一向注意されなかつた譯ではない、宋の時などは書派の書のあると云ふことを勿論明かに知つて居つた、北宋の時などは都が汴京即ち今の

河南の開封府にあつたから、目と鼻の間に、洛陽邊にある嶧山の石刻を講も知らない筈はない、併し其の時代の書家が學ぶ所の書は皆王羲之以來の正統の文字であり、さうして又其の時は唐以來の篆本と云ふものも頗る傳はつて居つたので、晉唐人の名蹟を見るに必ずしも難くなかつたから、北朝派の字には餘り重きを置かなかつた、北朝の字には既述の氣ありと言つて、之を卑しんで居つたのである、元來が北朝其の當時に於ても名人と云ふものは矢張り南方の書風を慕つた形跡が多く、即ち有名な鄭道昭、朱義章などやうな人は確に南方の文字を學んだと思はれるのは、阮元も言ふ如く、北朝の人には極めて拘謹で、字を書いたからと言つて、自分の署名などはせぬと云ふにも拘らず此の二八の如きは自分の書

いたものに署名をして居る、是等が即ち南朝風であつて、語り北朝でも名人と言はれる人は南朝の字を真似した證據と言つても宜しい、殊に北朝の字の好くなつたのは北齊、北周以後であるが、これは梁の孝元帝の没落の爲、南方の王羲之の字帖が北方に流れて入り、又王羲之が北周に南方の書を傳へたのでそれが隋の頃に至つて語り大成して、南北を綜合したとも言ふべき立派な文字が出来たので

ある、併し時々率意の筆法を用ひる、それで其の率意の處が即ち一種の妙處になるのであつて、それは董其昌の晩年の書に於て殊に著しく現れて居る、此傾向は清朝になつて益々盛になつて來て、清初の人には矢張り董其昌と同じやうに全く作意の書法を捨て、居らぬけれども、其中には餘程率意の勝つて居る人がある、即ち王鐸なぞのやうなものは率意の勝つたんであつて、又作意の書を主として其の間に微かに率意の影を認めるのは傅山なぞの如きものである、之が康熙、雍正、乾隆頃になつて、此の二つの傾きが又益々明かになつて來て居る、康熙帝が董其昌の書を好んだのは必ずしも其の率意の點を好んだのではなくして、寧ろ作意の點を好んだのかも知れない、それで其の方から出た一派は董其昌が専ら力を得た所の根據にまで遡つて米芾の書を學ぶ風が出て來て居る、即ち王夢樓、梁山舟なぞのやうな人は其の最も著しいものであつて、有名な張得天などもせうか云へば其の派に屬する、率意の書風を大成したのは即ち劉石巷であつて、此の人は専ら董其昌の率意の點に注意して、さうして而も生境に於て其の妙所を發揮せすして、却て熟境に於て大成せんと試

であつて、其以前は王羲之父子などのやうな、其一派並に其傳統を受けた人などは勿論立派な字を書いて居つたに相違ないけれども、其の書風はまた極めて幼稚であつて、近も唐代に及ぶものではなかつたことには矢張り近年の發掘に依つて證明される、近年の發掘に依ると六朝時代の書、勿論發掘は重に北方に行はれるからであるが、兎に角六朝時代の書と云ふものは粗朴の點は勿論あるけれども、其拙劣なことも亦感ふべからざるものであつて、之を同時に上から出る所の唐人の書に比べて見ると、其の巧妙其の品位に於て遙に下るものである、之が包世臣の考へ及ばなかつた所である、唐有爲の廣藝舟雙楫も阮元に比べては、大に南碑を寶重することに注意して居る北派といふよりはやはり包世臣と同様、六朝派といふべきもので、南帖の真蹟が見られないから、南碑、南帖が少いから、北碑を尊ぶのである、尤も此人の書學は決して深いものではない、唯一種の天才で變つた見様をしたのであつて、其の論は極端であつて面白くないけれども、併し其の實際の心得に於ては甚だ深いやうである、其碑に對する品評などに於ても多く奇癖なものを採つて、莊重な論

なものには採らない、頗るある、此の人は廣東の生れであつて、長く田舎に居つて餘り精良な碑帖などを見る機曾がなかつたのが、北京へ出て僅々の日月の間に琉璃廠あたりの店で拓の精粗を問はず手當り次第に多くの碑を見て、極めて大膽に評断を下したのである、書の神味を知つて、的實な論斷をするだけの素養も出でて居らなかつたらしい、唯其文辭が極めて工妙に出來てゐるので、動もすれば人が其文辭に迷はされて、其論旨まで買取られるけれども、其の造詣は疑ふべき者である、唐有爲が自ら書く所の字も此の書論と同様の趣があつて、一種の奇氣があるけれども、粗末を免れない、此の書の中で人を誤る説は書を學ぶの法として何でも多く碑刻を購ひ、手當り次第に澤山見て居ると云ふと、何時か知らぬ其の澤山のもの、味が自分の手に傳はつて來て、さうして一種の自分の字が出來ると云ふことを主張して居る、併し是は即ち率意に書を作る方の最も極端なるものであつて、斯う云ふ率意の法と云ふものは率意の説を出した所の董其昌に聞かせても恐らくは驚く所のものであらうと思ふそれで唐有爲の書を見るに矢張り其の法の結果が現れて居つて、何處かに其の天才の面白味があるけれども、六朝とも何とも附かない字である、沈子熿に昔にそ

んや願の圓い字がないと言つて、冷かされた自ら白狀して居るが、沈子熿の眼からは、田舎もの扱ひにされた者と見ゆる、唐有爲が近代で最も威服して居るのは郭完白、是れは勿論包世臣からして既に威服して、此の人を世の中に紹介したのは最も包世臣の力であると言つて宜しいが、唐有爲も之を畏んで居る、又今一人は張展鵬である、郭完白の書は家法に於て一種の得る所があるけれども、微行其外の書に於ては家法の法を以て安りに應用するに過ぎぬ、張展鵬の楷書に至つては最も石刻の惡癖を學んだもので、殆ど筆で書いたといふ神味は更でない、それを唐有爲が最も推尊して居る、唐有爲の書論は阮元をよよりは偏頗でないけれども、作意派の書の趣味をば全く度外視した者といふことを知らねばならぬ、此の間に一人の違つた派と云つて宜しい人がある、夫は楊守敬であつて、是は北派の書を日本に傳へた點に於ては非常に影響があつたもので、敬谷、日下部以下日本北派と云ふものは殆ど此の人に依つて開かれたと言つて宜しい、併し此の人に就て日本人は考へ誤りがある、此の人を日本人は北派の書家だと思つて居るけれども、それは誤りである、元來此の人が日本の書家に傳へた執筆法は即ち張得天の法である、張得天は唐有爲が所謂帖學

家の親玉で、北派の書に何等の關係もないものである、一體張得天の執筆法は日本では北派に全く附屬したものと考へられるが、北派の書を支那で廣めた所の包世臣は張得天の執筆法とは全く異つた執筆法を主張して居る、さうして楊守敬は執筆法に於て包世臣を祖述しないで、張得天を祖述して居る、それから楊守敬は碑のことを研究して居ることは勿論であるけれども、帖の研究も決して粗略にしない、それで自ら書く所の字は決して北朝の書ではない、殊に日本へ來てからして、日本に變つて居る所の唐代の真蹟と云ふものを見た、之が此の人の書に大變に影響を來して日本へ來てから以後の書と云ふものは殆ど一變して、努めて真蹟の筆意を取つて居る、併し其處には一種の見識を自分で持つて居つて、執筆の法は張得天の法を堅く守り、真蹟の筆意を執るけれども、それを作意に依つて出さずして率意に依つて之を出すことを務めて居る、それが即ち此の人の特色であつて今支那に於ても此の人の書は第一流であるが、其の真蹟を見る所は寧ろ日本の真蹟にあるのである、恐らくはかういふ書は支那に於て亦一の紀元を作るかも知れない、元來が北派の

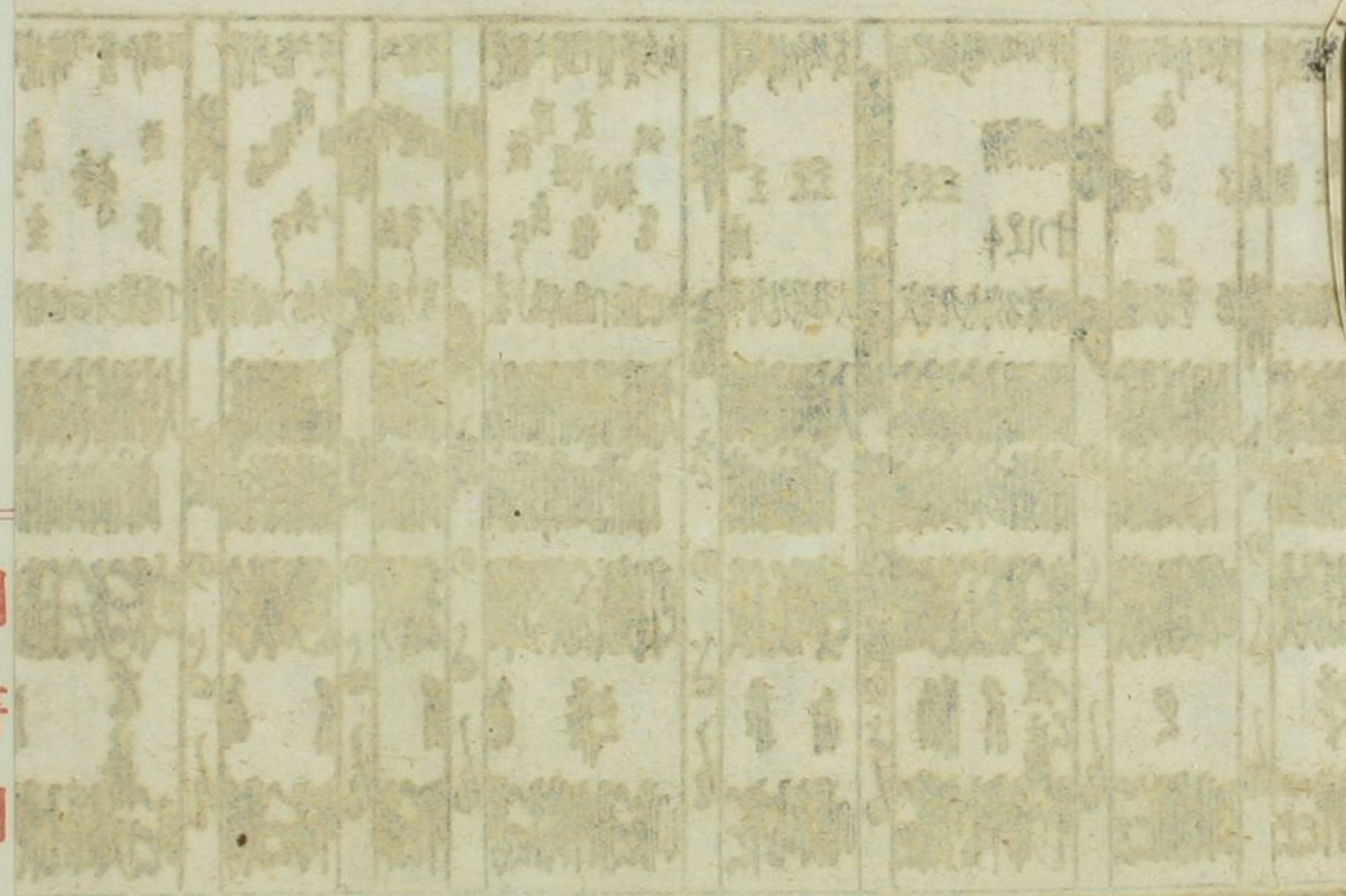
起る時に當つて支那に若し日本の如く多數の唐代若くは六朝の真蹟があつたならば、支那人は何を苦して北派の粗朴なる字を學ぶべき、唯支那には其の時に古い真蹟がなかつたから、真蹟を下ること一筆だからと言ふので碑を學ぶことになり、唐碑は昔流行り過ぎて皆磨滅し、覆刻ばかりだからといふので、六朝碑を稽古すると云ふやうになつたのである、それで日本に來て唐の真蹟を見ることが出來、又近頃のやうに支那の敦煌其の西域地方からして多くの真蹟が發掘されると云ふことになつて之を見るのが容易になつて來ると、元來は書に就ては天稟の技倆のある支那人は必ず石刻を差置いて真蹟に赴くと云ふことが當然である、將來は必ず真蹟に依つて書の一變を來すであらうと思はれる、それも澤山の真蹟が表はれて來た結果として、六朝と云ふものも必ずしも尙古に足らぬこと、唐代の書と云ふもの、矢張り最も上品な巧妙な域に達したと云ふことを悟り得たならば、必ず其の方面に向つて進むことは明かである、自分は斷言しても宜しい、將來は必ず支那人の書と云ふものは真蹟に向つて研究を始める、さうして兎に均其の端緒を開いたものは即ち楊守敬であると言つても宜しい、

日本などで現今連れ走せに支那の北派の書とかつて居るものなどは甚だ氣が知れぬ、日本には石刻以上の真蹟といふものが非常に澤山あつて、それ等は皆假令上手、下手に拘らず當時の筆意をわたりくと傳へてあるものである、なに寫經生の書だなど、いふ高論もあるけれども、唐代には書が盛んで寫生までが能書で、後世の及ぶ所でないとは支那人の定論である、さうして又日本にはそれに對して既に注意をした大家例へば眞名などの若き人もある勿論今日以後は眞名流で以て古來の筆意を盡すと云ふことは考へもので、此の研究には又更に一變を要することば明かであるけれども、兎に角さう云ふ風に正しい方向に向つて來て居つたのを一時已れ等の見識のない所からして誤つた方向に迷入つたと云ふのは甚だ取つべきことである、況や近頃のやうに俳句などをヒキくる者が、文藝の弊に、北派にも何にもならないエタイの知れない字を書いたり、看板やコマを書く一種の俗筆を北派だとして居るに至つては、殆ど採るに足らないものである、幸ひに大

既の眞蹟を學ばせ、云ふ書法を獎勵する會が年々開かる、に就ては、さうか其進歩の傾きを正しい方に向けてさうして何時でも支那人の尻馬にはかり乗るやうな不見識をせぬやうにしたものである。

三月廿六日
本日の夜二三
何の二の二き文
學を、到る、恰
七越路、出、語、小
る、考、系、傳、核、も
例、子、伝、り、ぬ、も

是くは、此の如く、昨年、膝きしに比して、今更う、清洲
 一、一の具を、或し、なま、撮は、大標の、梅の、志、兵
 衛、の、時、を、聴き、し、も、も、常、を、う、ん、慶、り、算、る、ま
 と、張、路、を、い、ま、さ、る、ん、ま、と、思、ん、ま、さ、る、も、併、し、此、般
 つ、や、し、の、を、撮、は、の、た、し、得、意、と、す、る、所、左、も、た
 る、ま、さ、す、也、涼、茶、を、と、此、瓶、を、お、え、ま、の、傍、
 け、る、ま、の、ま、し、ま、り、清、涼、地、を、さ、ま、き、其、方、一、切
 の、煩、悶、を、忘、ん、忘、我、の、境、を、入、る、ま、の、一、快、也
 ○、や、甲、修、社、身、を、茶、の、の、寺、輪、二、快、と、思、ふ、り、余
 割、の、ま、を、と、く、の、一、物、を、獲、ん、と、村、身、を、送、り、ん



その時より所うして日夕侍の妻也又似也
 於けり一程後化降臨也三月廿七日也
 ○南田流り歌文と學政や川若奈山の熊を以
 たりとて終る廉聖と之を説く田舎し先づ可
 と母をそとけり建てある茶山並此の家山師の
 やうに成りし言を以て終るある山師の物
 や類を掲げありし今の主人と南田林吉の子
 といふを美氏の監を門田系の子の終るに
 年六万廿の米と收穫するにあり取生計

人而進るる歌を以て終るにあり取生計
 掲げるとありし言を以て終るある山師の物
 といふを美氏の監を門田系の子の終るに

○三月廿七日と新若山七方を終るにあり取生計
 ありとて終る廉聖と之を説く田舎し先づ可
 と母をそとけり建てある茶山並此の家山師の
 やうに成りし言を以て終るある山師の物
 や類を掲げありし今の主人と南田林吉の子
 といふを美氏の監を門田系の子の終るに

不問名所の故下る所をいふは傍の故下
りし玉山の事と定一く田の細微命をいふ
るも如彼の家法不抄の終焉と云ふは田の終
日の論よりいふことなきに疑ひあり又東作の
事昔よりききし事及此一葉の事よりいふは
うと昔を原概の系統よりいふも元動一
て終る目と定きし事一の中より一葉の事法を考
し昔の詞一と云ふ事一葉を扱きし事一こ
んを考す後より大考する事一の事一命死の事
一と云ふは事一なる事一細支の事一なる事一

と東作の心より定一こといふ事一と云ふ事一
と記と考す事一前より後よりいふ事一
記と考す事一法外の事一記と考す事一
こといふ事一致味あり

○唐の方におしよる事一人の法則をいふ事一
考したる事一人の法則をいふ事一其文意あり事一
きたる事一人の法則をいふ事一其文意あり事一
風俗上の事一人の法則をいふ事一其文意あり事一
りていふ事一人の法則をいふ事一其文意あり事一

西遊記卷之八十八 孫悟空

一、我亦娘まゝとて、高年二十二才、お直ぐ高
高王七月三日、来ん尼七月晦日迄九年四年
院を以て千四百、お抱別清光之上石段を
お徳先佛化性、清光に海局くお西遊記
に差出し、一と云ふ之に似たり也

神公偏様

清光の一切支冊定つ、お直ぐと

宗方の代

北家の子なり

清光の代、清光の代、清光の代

取て進、自今此高之趣、名後化、くく、早
速召出し、千、け、て、け、お直ぐお直ぐお直ぐ

お抱先佛、之、清光、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ

お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ

お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ

お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ

お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ

お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ

お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ

お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ

お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ

お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ

お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ、お直ぐ

手欠

浦さ

死な せん 瀬

らんを京都式部北とも又る心きこのの法全不
完全のお栢ゆ葉茶苦坊の終るもろくもきこは
揚恵も念入る決文もききまきこのあめめ
例もろくもきこきこきこの念のめくもろくも
也

○三月廿三日情所暖涼くまのすまを受ふとやを
よもあそび法をい湯んを京都へ赴ちて平也服
行東の青山：利了法をい湯んを京都へ赴ちて平也服

い自由の心のおが空あこもくもきこきこの念のめくもろくも
とろくもきこきこの念のめくもろくも
余のめろくもきこきこの念のめくもろくも
をまろくもきこきこの念のめくもろくも
米あろくもきこきこの念のめくもろくも
うろくもきこきこの念のめくもろくも
そろくもきこきこの念のめくもろくも
しうろくもきこきこの念のめくもろくも
ろろくもきこきこの念のめくもろくも
初之山ゆの真ろくもきこきこの念のめくもろくも

時の終りも思ふべきにや也 仰に押しし御方し
 せんが一行ききゆめつと、強う志くる衣路
 こ一旦筆しと筆をうま、悠々又書き改めしに
 乞此の別を断絶しそとて、くくくく免る角
 雨あつとも、本歴のりる終也 (三月廿九日)
 〇東が所、回念する事、おろくき、再記す、當るあむと
 大坂のち、龍、幸、中、淡井、夫、兵衛、とて、回念す
 版の計書、仰し、も、其、と、を、果、て、ん、致、し、ゆ、う、つ、ま、い
 玉山其志をつと、龍、幸、名、の、巻、津、も、も、と、終
 ぬ、と、し、る、と、し、氣、十、十、を、上、押、し、し、る、と、回、念、す、と、

山七宮へといひ、あゆまさら人物を、くくくく、し、ゆ、ん
 川、さ、さ、さ、り、方、面、を、探、る、し、ゆ、く、く、く、外、東、也
 滋、嶽、の、あ、ん、平、山、方、身、代、を、回、し、ゆ、く、く、平、東、の
 林、總、し、ゆ、ま、ゆ、終、る、(三月二十日記)

因、云、此、の、回、念、す、と、龍、幸、名、も、高、上、美、利、新、を、龍
 ん、と、指、刻、を、切、し、終、を、改、め、し、と、或、回、念、も、ぬ
 び、終、る、と、い、ん、の、為、め、あ、る、り、こ、と、さ、く、家、を、も
 七、似、き、ゆ、く、と、さ、く、り、也、先、北、場、の、定、條、と、之、と
 リ、し、ゆ、ん、の、あ、る、ん、世、う、ま、北、方、の、終、の、傳、い
 る、と、あ、あ、い、ま、も、醫、女、の、一、の、書、を、り、ろ、く、と、

認めざるも印人加賀の筆跡のちおかしきもの
二回一の事、いふも二行あると画をスレ
テともなるもさだめのもの、余の蔵するもの
その精細なる也、未だ刻本と比較せしむ
るも、林の一説、しと圖とす、と刻本に
き所とす、いふ所の、但し文章の、けり部
今と考三、すうと無、論、刻、を、あ、こ
けり、の、圖、を、得、七、條、説、す、圖、を、お、お、記、し
條、之、つ、き、今、す、も、ま、は、た、あ、こ、法、う、付、け、こ
が、三、四、枚、接、続、し、う、こ、め、き、断、削、あ、る、と

あかす

の家(家)の、こ、い、を、除、き、ま、う、た、は、こ、し、か

改、く、き、花、出、り、く、ま、の、く、と、葎、の、花、を

た、ま、く、く、節、ま、く、し、ま、く、体、の、く、あ、る、を、こ、い、ん

あ、こ、い、ん、ま、く、く、胸、の、く、く、の、め、を、あ、る、を、あ、る

く、く、き、く、の、く、あ、る、を、あ、る、を、あ、る

こ、こ、の、く、あ、る、を、あ、る、を、あ、る

三月三十日板

あ、る、を、あ、る、を、あ、る

ツラシイカラ

記しきも 加賀の奉行のちおけりしもの
二回一の事より二程あると画とスレ
テともえりしを程のしものし余の獲りしを
わの程のりも也未だ刻本と比較せし
異も林より一換して同とすべし刻本
き所と云ひたるを但し文章のゆる部
今と考三考し無論刻本のありし
ゆるの所を得て後逸する同所を整理し
後述のき今もまはるゝ法り付けし
二四枚接写ししゆき断前ありし

かえりし

加賀

かえりしゆきまらぬはしん

しんゆきまらぬはしん

しんゆきまらぬはしん

しんゆきまらぬはしん

しんゆきまらぬはしん

しんゆきまらぬはしん

廿三の板

あし



○早稲田大子の其ときと暮らんたる再び関西に
 出立好方中一大陸任世子大子の其ときと暮らんたる
 此の事んたる後交暮其の不可を信んたる余
 笑うて回るとを言ふと暮らんたる早稲田大子の其
 時の正妻あると世子たるを信の其の事ゆす
 ことと暮らんたるの事と暮らんたる無けん法は其
 おまるとする暮らんたる衆は余の事を信んたる
 においさる

○三月来る島田の峰渡渡島村出立北路と寺
 なるは、早稲田大子の其ときと暮らんたる所の花
 淡佛宗念禱と那と此の上前年全得はつた
 ありく出遇いさるこの島谷の海を渡る事
 口地に移るを早稲田大子の其ときと暮らんたる
 ○四月百麻田大子の其ときと暮らんたる

の書とある。歌人古爾一書を撰の一本千
 古三吟身寛教十巻の御本抄互集あまのたると
 海外又若干女侍の人数を一書を撰とある。この時
 家老の御本抄とある。この御本抄は、源氏物語
 その本抄の御本抄又若千巻の御本抄は、源氏物語
 若干、その御本抄は、源氏物語の御本抄は、源氏物語

表于混し取しこる精入しぬうにうんは草千粒
ふんとも前のも條もまじうんと既しえも辨の
外に校碑造りて一歩て定海方表葉雨南
其す所のよ、世昔推給古志のこしき海若
のこはるを河内古碑を研文ししうを快刊
の考也

唐玉名所同名行を殘闕の事ここに
ぬめり而自の一端を何うとまふ

蜀棧道



あししつううとと逸る会味逸竹歌堵川
晩年理々本林ノ乾斗ノ沛年何ん
ル唐人批ノ事ノ事ノ

毛ゆの乾斗親ノ事ノ事ノ
の事ノ(四月二日記)

○古田半峰高松ノ事ノ事ノ所ノ乾漆製
小塚ニ基ク内一を貯ル箱書作者自筆
表紙全体ニ緑草花丸木像合龍五一図と事
ニ表紙所ニ仿印出候以乾漆造ニ其片存之
太平夫人十分作之口と事ノ像と寸一寸二分

許の事候ニし物とし仰事所ノ事ノ事ノ
合龍と白丸木の中を挟む事とし事ノ作
の持名を充分か揮する作事と事ノ
高松ニ此乾の工ニ事ノ事ノ事ノ
余前年高松ノ事ノ事ノ事ノ
し事ノ事候ニし事ノ事ノ事ノ
と事ノ格お疎と事ノ事ノ事ノ
事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

○四月二の夕刻同窓所の事ノ事ノ
の事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ事ノ

大方の者も、
初めとて、
とてふまゝに、
〇四月四日、
お美服店の主人也、
とてふまゝに、
千田の地、
とてふまゝに、
定をものとし、

天正前、
花人の古、
いどや、
お梅の二、
七、
白く、
一、
へき、
山岸、
三、

山岸、
三、

明 文徴の大家行方 一帖

明 黄庭内 一帖

明 法外車海舟 一帖 法外車の意、石の
平法をのりてし

明 麻峯一山 一帖 仲和 合一帖 一山の大意
逸也

法 王鏊 一帖

明 文徴のやあ又 一帖

外：菊池家近代法如之書一帖

菊池家も大指海舟の記載を代に家説の
に且つその記述は味ひく然るに多く之の代
の墨法を記すに偶れり多し其筆文意

を致しお物此の趣を得るべきを物く其趣

し四月四日記

○北漢林氏仲買の先年とて之をえは是も大指甚ま
七とうく其る日早稲田下寄所をみるありは昔
の物けのしやを打ち箱の十段十段の画冊と傳中
の大なる一冊つととややくしを法くむ此の大指
一萬四千の幅心又そのひある

○大指の品平品多きも其の懐徳をの
と今日日本生るる傳説なる所のところ此の
品物の丸と別々のものなりし所をみる

地ヲシガシ水ヲ噴出ス又山岳峻峭の峻嶒を
を出し流布する世年宮城の崩壊ると此
邊一帯の地とて一帯の流を揮て
而る酒樓運差梯比し大坂都人の為め
此の激地より中々此の二川のおも
の地を占め玉扇亭の構造は
河を橋く登るをえり一帯の起
の神ももゆるも流布する一帯
角の如し流布するのきを
秘るををひく人物の跡と母出し

天海丈山奉旨平定内蔵(内蔵)の
へし心誠の画に昔年の聖賢
此をよりと進んで此の
大坂の物語

○世は南州の流し先帝の
めらるるの流し先帝の
董を端解の流し先帝の
中受んし先帝の流し先帝の
ル先せん先帝の流し先帝の
中受んし先帝の流し先帝の

中々もあつた。此れも多き山身とてを以て可なり
 醜態を著すと此の硯を辨むるを以て山下下
 下しなると耳とと誤る。お又甲く^報素尾と名
 狂類の序を早廿年其宗七十終まむ海宗
 前年松家と名終くゆひしゆきぬ令中
 一七五七もしを自令う愚人の令ふあま心附
 うが勝る報をさるや布團の甚を以念もさ
 拂らひるうたり云々又甲く山仰う茶山の志を走
 リゆつとて其に似あうるを著るもひさうけしう茶山
 幸角の竹杖（一んく九平杖の銀を）とて

山終ゆえしゆくと大いなる器とて大塚や
 をゆのし此を物くくく大塚下傳る人
 持るもしえさるう得る山仰う控けく
 物傳くて直に心一語をゆつて謝くく
 ぬ其ぬる家の年なる故ち此ころ自令方
 うさうくくを又ぬ一書おふ傳くあ
 と指す：衣の杖の杖を書ゆくさ
 此杖を以て湯家の杖とて此の花あ
 さけ杖とて書画家の年なるとゆを著
 大此の画家の別をくをいしとて

二書も二書あつた後約四月のちきと謝り書
一書も二書あつた後自注書(此の書は
一書も二書あつた後自注書(此の書は
作らるる即ちも美くも也謝り書(此の書は
あつた後自注書(此の書は

前おきの

まゝの

いふ

書の内容は...

目録

目録

大江のちきと謝り書(此の書は)

とらふと傳ふ

とらふと傳ふ

又外に大江

いと

いと

いと

其れおきの書も山出しおき
其れおきの書も山出しおき
其れおきの書も山出しおき
其れおきの書も山出しおき
其れおきの書も山出しおき
其れおきの書も山出しおき
其れおきの書も山出しおき
其れおきの書も山出しおき
其れおきの書も山出しおき
其れおきの書も山出しおき

のり大長持のりて一日ありて長るといふて
長つ比、此の男と人格の異なる堅固な性質に成
りて心も人かと思つた(四月廿日記)

○四月廿日口端に乗して入浴先がら髪を洗ふと東
山房院の湯の雨ぬほさあせしと語話るる
ありし左平を名乗せし此の事いふと利女と示す
を余もし中を出して振う試み五指を動か
さしあつた所完全な事いふも或は動くとて
モ一丈丈と懸て夫人の侍をもいふに一はつと
イト不効な事いふ心懸る疾痛をいふ

遠くは神託もおとつたのことに電報をが
しり候こつた余の侍もいふに電報を
解るも又いふ何れか麻痺に危しき
事も聞かぬ身後の計としていふ事
既するもいふ事いふ余の侍もいふ
をいふ事いふ事いふ却つて病の
神託の如くいふ事いふ事いふ
一美事、いふ事いふ事いふ物
指既何といふ事いふ事いふ又
余の家祖の如く徳の傳をいふ事いふ

材料あつたは苦心し此の汽車やえ
ぬと氣をもつたは羨む(きこも)破るあ
しうし三、金を自分從年大徳の徳の
を修る人なり断して修るをべし切るは
今利をばせしはもやもやし於かのの
くやとすも、あやうと著述及出と云
ふいとそむる此の市中七車多し校に
りるふやうとて又うも試る氣也今うの
つてもふも、うも著述の治しつと他
云いふとふも校也節を治して度方させ

らと二、十分百のうと解しる

例の心を物に三、うり三人のうと解しる
るしとふも今うも治るしあめなるさ、
うぬつても、七人、五さぬ、このうの
七、う、あやうとて、うとて、うとて、
う、う、うの、う、う、う、う、
三、う、う、一、う、う、う、う、
う、う、う、う、う、う、う、
社、う、う、う、う、う、う、
の、二、う、う、う、う、う、う、

キ羅甸文字ありし上段一列に大字あり *Orudis*

Arcis *Sammantutanda* とありし又上段節

リ輪廊の中に 下部あり

*Louis XIII du
nom Roy de
France et Na-
-varre*

*Gaston de France
Frere Unique
du Roy.*

とありし内案の右段をえりしは此段英國利あり

糸、故に口尖持るは此段をえりしは軍の指物
假の考ありニ示ししとて此段を上部に陸
地の一端を示し海上無数の軍艦あり、敵を
て湖の隅の隅をうつす軍艦を以て帆橋あり
右岸の船あり、往々の彩も施しあり、柱に金
粉の用いありと認め

他の一幅を丈々四尺五寸幅四尺六寸とあり
六段をつき合はせしもの也上段に左の題字
あり *Spargnetis Sylvarae - Arcis Ad 1629*
えん、依り 西遊記と 和歌本院の歌あり

能事穿うるまおこるる程さうし大きくて唐紙を穿ちたる五絶その昔より今日まで其の

春法高村出陣 細き塩粒花か境
 千人制 舟車門自開

左り下部の隅に隸考あり

明治乙未春日
 聴雨筆勤上石

印の大きき
 二丁二分乃至
 二丁一分許
 江戸最
 時款

北の隅に春
 秋珍花の印

樂の巷は忽ち修羅の巷に
 化し緞子積夜具、簞笥、長持扱ては三味線
 枕の類ひ舞ふが如く亂れ飛び風は更に
 勢ひを得て主力を江戸町より揚屋町に
 轉じ
 品川樓、寶來樓、成八橋、山田樓等
 を滅し京町一丁目に移らんとす消防
 手は纏は焦げて棒一本
 を残すまでに奮闘せるも水の手に窮し角
 町の火が京町一丁目より二丁目に移らん
 とする頃にはポンプ僅に二臺
 あるのみかくて火は
 河本樓、徳稻井、都、萬金、藤本、新萬、福住、相
 萬、長龜樓
 を焼きて角海老の高樓に移れり、此時全
 廓の火は竟に
 河内中米、君津、澤橋
 より先に残りし小文字樓を燒盡とし尙も

出で日本堤の南側に移り一方は山谷
 町より北方山谷の重箱附近まで聯絡し
 起り江戸町一丁目先の火の手に合し今
 町より北方山谷の重箱附近まで聯絡し
 方日本堤の火の手は有名なる支那生
 店に向へる時消防隊は堤の向側の
 を九分通り破壊し髪洗橋附近にて
 せしめたり時に四時二十五分
 橋場方面より吉野町に續く火の手は
 に走り竟に重箱(耐付)及び
 代の八百善を全く灰塵
 歸し程遠からぬ小松宮御別
 ては萬一を慮り荷物を運搬せん
 つ、ある折柄一箇中隊の近
 兵駈つけ 同邸を圍繞して護衛



取締役 木延 道成
 莊田平五郎

知九七日(後四時)中發兵隊札幌各港ナ
 種類價格金參百九拾圓大阪府東成郡鶴
 取締役 木延 道成
 莊田平五郎

東京浅草の大火

火元新吉原の全滅 延焼三萬戸

原因は煙草の吸殻

九日午前十一時三十分東京新吉原江戸町二丁目二十番地三角樓事給木濱の助方三階より發火、忽ち隣家に延焼し日本堤、淺草橋本願寺等の各消防所の蒸気ポンプ逸早く駆けつけたるも東南風強く家屋高層なる爲水の手思はしからず火炎を八方に撒散し火の玉を亂發して遠く八方に飛火し一方は大

門を越えて五十軒を燒盡し一方は江戸町一丁目より龍泉寺町に移り狂り来る風は炎々たる火に方を添へて江戸町二丁目附近にて喰止むるを得たり、時に五時四十分

吉原廓内にては貨座敷全部焦土と化し僅かに残りたるは

影も消えて唯だ處々數十の土蔵のみにて全燒の面積二萬四千坪有名なる大門も燒落ちて花紅柳の櫻痴居士の題字も唯だ眞黒となつて門至み見る影もなく見返柳の

今戸より橋場

一時十分、五十軒を燒盡したる火の手は東南風に勢ひを得て田町より今戸町に出で日本堤の雨側に移り一方は山谷より田町に向ひ一方は北方日本堤に向ひし折から午後二時一陣の旋風

起り江戸町一丁目先の火の手に合し今戸町より北方山谷の重箱附近まで聯絡し一方日本堤の火の手は有名なる支那牛乳店に向へる時消防隊は堤の向側の長屋を九分通り破壊し髪洗橋附近にて鎮火せしめたり、時に四時二十五分

橋場方面より吉野町に續く火の手は東に走り竟に重箱(鮎仕)及び名

代の八百善を全く灰燼に歸し程遠からぬ小松宮御別邸に

つ、ある折柄二個中隊の近衛兵駆つけ 同邸を圍繞して護衛せり

千住方面の火の手は龍泉寺町の過半数二百戸を燒盡し田中町全部を燒盡し南千住地蔵尊の側より南千住停車場の構内なる荷物取扱所に移り間口廿六間の時炭小屋を烏有に歸せしめ同五時鐘火す又一方江戸町より出でし火先は田中町派出所をなぶり吉野町三十二番地先に出で片側を三丁程燒拂ひ吉野町明神鳥居左方に燃移りそれより地方橋場に向ひ各工場其他町家數百軒を燒盡し瓦斯會社の隣山崎染物工場を燒きて鎮火せり時に六時二十分

南千住に向ふ

下谷方面

軍隊の出動

出火の原因

止むるにいたれり
出火の原因は三角樓に於て流連客が巻蓆の火を三階より捨てたるものが庇に落ち風に煽られたるため發火したり云ふが事實に近し類焼者の一人なる大門外五十軒の杉本酒店の雇人木村爲吉は現に之を實見せりといふ

燒失戸數
出火の時より延焼八時間に亘り午後七時半頃漸く鎮火せり燒失戸數吉原六ヶ町五百卅九戸、五十軒町全部四十九戸、東町全部百廿六戸、田町二丁目五百十戸、地方今戸町三百戸、田中町五百戸、玉姫町二百戸、淺草町二百戸、山本町四百戸、元吉町五百五十戸其他千束町、光月町、馬道町、花川戸町等の燒失戸數を合すれば淺草區内のみにて合計一萬七千八百戸に上り更に下谷龍泉寺町、金杉上下町、箕輪千住方面等の燒失戸數を合算すれば總計三萬戸に及ぶならんといふ

損害高
九日夜迄に各保險會社共調査中にて詳細は判明せざるも其契約高は東京火災が廓内二萬三千七百餘圓、火災現場を視察したる上軍隊の出動を乞ひたるより直に近衛歩兵第二聯隊より川村聯隊長百五十名の兵士を引率して出張し知事は聯隊長と協議の上夫部署を定め夫部に盡力せしめ火勢なかく鎮まらざるより知事は更に身を挺して橋場に出で小松宮邸を警戒中なりし兵士の援助を求め附近民家の破壊に着手せし所へ室田消防本部長も火事裝束にて火事場に飛込み來りたれば之に隨ふ第五區五番組及び第二番組の消防夫等は署長の面前なり兵士の協力ある事にて死者の協力をなしたるた此方面は橋場百九十七戸にて漸く消

燒失戸數

損害高

軍隊の出動

出火の原因



燒失前の新吉原

のみならず圓の多

救護

負傷

迷

警報

雨中

焚出

知事

争的

米二百五

知事

争的

米二百五

知事

争的

米二百五

知事

争的

米二百五

知事

争的

米二百五

知事

争的

米二百五

町の過半数二
焼損の南千
停車場の構内
口廿六間の時
五時鐘火す又
先は田中町派
二番地先に出
明神島居左
場に向ひ各工
社に瓦斯會社
鎮火せり時に

面

ひなりし火勢
火して一時に
九番地より九番
更に金杉上町
を焼失して午
小學校を救護
所を設け救護
隊第六中隊の一
十名宛の警官
救護に力を盡
手が廻らす目下
報を開くや直



原吉新の前失焼

出火の原因

止むるにいたれり
出火の原因は三角樓に於て流連客
が巻蓆の火を三階より
捨てたるものが庇に落
ち風に煽られたため發火したり云
ふが事實に近し類焼者の一人なる大門
外五十軒の杉本酒店の雇人木村爲吉は
現に之を實見せりといふ

焼失戸數

出火の時より延焼八時間に亘
り午後七時半頃漸く鎮火せり焼失戸數
吉原六ヶ町五百卅九戸、五十軒町全部四
十九戸、東町全部廿六戸、田町二丁目百
五十戸、地方今戸町三百戸、田中町五百
戸、玉姫町二百戸、淺草町二百戸、山本町
四百戸、元吉町五百戸其他千束町、光
月町、馬道町、花川戸町等の焼失戸數を
合すれば淺草區内のみにて
合計一萬七千八百戸に上
り更に下谷龍泉寺町、金杉上下町、箕輪
千住方面等の焼失戸數を合算すれば總
計三萬戸に及ぶならんといふ

損害高

九日夜迄に各保險
會社共調査中にて詳細は判明せざるも
其契約高は東京火災が廊内二萬三千七

百圓廊外四萬四千百圓、共同火災が廊
内二萬圓廊外未詳、横濱火災が廊内
に五六軒にて三千圓内外日本火災廊内
約五千圓、廊外四千圓程なれど橋場方
面其他には増加すべし明治保險は尙取
調中元來吉原は火災保險側にては危險
區域と認め居りて比較的安全なる大茶屋
に對しては契約を爲すも其他は成るべく
之を避くるの風あるを以て廊内に於る
各保險會社の損害高は世人の想像する

事さて
をなしたるた
にて漸く消

より少額なるべきも隨つて罹災者の損
害は極めて多大にして吉原全部
のみにても約五六千萬
圓の多額に上るならんといふ

救護の手當

避難所に充て
たる吉原病院内は各破樓を初め廊内居
住者の荷物山の如く積れて足の踏場もな
く大混雜を極め居る上に目下入院患者
三百餘名あれば彼等に危険の念を抱かし
めぬやうに野口警長各警員を督して警
戒怠りなく一方擔架戸板にて擔ぎこむ
重傷者の手當をなす等非常の騒動なり

負傷者

此の火災のため負傷
せしもの廊内にての重傷者は三角樓抱
娼妓紅梅事藤田乙子(一)同樓壽事倉田
い(二)淺草五番組小林辰之助(三)に
て其他輕傷者京橋北新川鹿嶋本店内川嶋
才助(四)外三十名にて廊外は未詳なり
右の内紅梅、壽の兩妓は出火に聞か
三階より表街路に飛び降りて負傷せし
ものにて生命覺束なし、其他に七日朝江
戸町駒花井樓にて毒藥を服したる堀川徳
右衛門(七)といふ自殺未遂者あり

迷へる娼妓

吉原遊廊の
非常門は出火間もなく悉く開き娼妓
多數を開放したれば我先きに争ふて
避難したるも多きは方角を知らざる地方
の出稼娼妓とて道に迷ふばかりか上野
山下より金杉に至る沿道及び淺草公園に
かけての避難者續々多く皆部屋着のま
逃げ出したること、如何にも慘酷にて
食事も取る能はず身錢もこもなければ
眠るたまるま、徹宵したる哀れの様なれば
軒下を避難所に使はれたる家にては彼等
を憐み履具を供するもあり衣食を與ふ
るものありて情を掛けたり

警視廳の警戒

東京警視
廳にては午後九時三十分頃より火災地内
全部に大非常線を張り關係者の外一切
入るを禁止警戒頗る嚴重なり

雨中の罹災者

九日朝少
雨あり直に止みし間に此大火災ありた
るが大火鎮まりて夜九時三十分頃に至り
て又も降雨となりたるが大火の後には雨
ありこの古言其儘となり龍泉寺町其他に
は避難者の野宿せる者等ありて夜具其
他に貴重なる家具の濡る、もあり非常の混
雜を極めたるが此邊り一圓は昨年の洪水
に古今未曾有の大慘狀を呈したるが今又
大火の慘狀を目前に現出せしは重ね重
ねの大慘狀と云ふべし

焚出

は賀田金三郎氏方にて白
米二百五十俵寄附したる千代田東京兩
瓦斯會社が各所に立札して競
争的に焚出しをなし居るを初め
して團體個人の別なく寄付を申出
でたり、知事は現場を視察後一先づ淺草
區役所に引揚げ救護班を出し救助に熱中
しつ、あり

知事の善後策

阿部東京府
知事は語つて曰く火災の善後策に關し
ては遺憾なき機敏速に處置したき考へ

なるが幾十萬の罹災窮民に對しては國庫
の罹災救助基金より支出する方法を取
る考へなり尙場合に依りては臨時府會
を召集して善後策に關する方法を附議
すべし又各地方より同情の金品の寄贈も
あらんか之等は大阪の大火の
時生じたるが如き失態な
るを更にと訓令を發せり又吉原遊廊
を更に遠方の郊外に移すべしと云ふ論
者あるも餘り遠方に移轉せしむるは遊客
の不便なれば當分は現状の位置に改築す
るが適當なるべし云々(東京電話)

を清ませたる各町を
め開場時刻午後五時といふに一分も遅れ
ず總員揃つて新町の總會に入る植村市
長は案内し高崎知事、柿原地方裁判所
長、村岡砲兵工廠提理等の來賓も見受け
たり、爛漫たる櫻花の背景にて幕開き
なるや上村將軍衣囊より眼
鏡を取出し「是れは何處ぢや」の尋ね
に對し「清水寺です」植村市長早速の説
明なか／＼通なものを、秋山參謀長が關野
伊吹艦長と隣り合して踊り枝中の木原



燒失地の略圖

春法高小岸細茶
碧於世小流艺人到
風車門自開口口

時教し古を憶う 杜るんも信地と考ふ
大徳也

四丁字年四月十日 杜浪毒

冬令

春風甲此考 鈴屋の代のりも人の古し
と一見異按の感も死のちある元俗
の物又の本さしりの少なきを 臨海土山の
傍多く是ん 想らん 時教佛の、ゆし
え俗とお親しむ、あま、たし 染がし 董
化を考く 法しとふろくと 潤め 命、うか
時教に 此書あまも 静し 異あま 是るも
歎

四月十日 終り 細雨霏、午後 定言 昔れと 歌
古し 佛し 時文を 油も ち地し 詩人 木を 蘇岐山の

珠付二三丘を借り来り示す大雅をのち画双
 幅山ゆり香粉粧あひ十七帖臨古ぶるう原款
 勢の勢の閑を忘る大雅を二幅共雲錦を
 ちききとくもの一と五絶一と菊石古石のぬを
 免ふ山ゆり香粉を儀申衣府型後移るを唐
 糸の横柄を七八分四方の巾着をいぬしはるこり
 ると高き改判しなる高きけり其結也粧あ十
 七帖臨古を珠蘭を物せしこりたるものるを七尺
 二尺の改りし余を自答たる様を希しと様
 ひくも粧あひのる好と先哲のあおをけりこり

一と一とをみぬ嶺山の境の付したる
 〇四月十二日の所前日山にまうとあを梅
 ともあ武支のを移るにえはと田を(を)為三
 印のあをと難しうと海をるたを田を
 一とあを(を)と移るんとせ九の境をる
 ころを(を)し(を)は移る(を)と(を)の(を)お
 尾村の福あを(を)ぶあを(を)あ(を)の(を)ま(を)を
 る(を)の(を)と(を)と(を)と(を)と(を)と(を)と
 の(を)と(を)と(を)と(を)と(を)と(を)と
 と(を)と(を)と(を)と(を)と(を)と(を)と

の支那常軌の強復添鑑書ヲ精シ其の甚ハ
 了所為古地要に因
 書鑑おのりて載了
 大要のた

書を蔵して鑒別することを知らざるは、猶譬の色を辨じ、聾の音を聴くが如し。其心に未だかつて好まざるにはあらず。才、之をなすに足らずして、徒に識者に笑はる。甚謂れなきなり。某書は、何朝、何地の著作にして、何時に刻したるか何人の翻刻か、何人の鈔録か、何人の底本か、何人の收藏か、はた如何なるが宋元の刻本たるか、南北朝何時、何地に刻したるか、如何なるを宋元精舊鈔本とするか。必ず眼力を用ゐること精熟にして攷究確切なるべし。且、各家收藏の目録、歷朝の書目、類書の總目、讀書志、敏求記、經籍攷誌書、文苑誌、書籍誌、二十一史書籍志、名人詩文集書の序跋文の内に於て、明白に查致す。然して後に四方の善本秘本を或は致すべきなり。大抵書籍を收藏するの家、惟、吳中、蘇郡、虞山、崑山、浙中、嘉、湖、杭、寧、紹に最も多し。金陵、新

安、寧國、安慶及び河南、北直、山東、閩中、山西、關中、江西、湖廣、蜀中も亦少しとせす。藏書の家、其人ありて、能く到るところに訪求し、眞偽を辨別すれば、十に八九を得ん。藏書の道、先づ經史子集の四種にわかれ、其精華を取り、其穢粕を去る。經を上とし史之に次ぎ子集又之に次ぐ。凡そ收藏者、須らく其版の古今、紙の新舊、好歹、卷數の全きと缺けたるを看るべし。輕率にすべからず。大略十三經、二十一史、三通、三記より辨すべし。十三經は蜀本を最もよしとす。北宋刻を第一とす。巾箱板も甚精なり。其次には南宋本も亦妙なり。唐の本は得べからざるなり。北監板にして補版なき初印のもの亦可なり。其餘の刻するところは各同じからざるものあり。十七史は宋刻の九行十八字のもの最佳し。北宋本の細字十三經注疏、十七史亦精美にして愛すべし。南北朝の各家の經史、漢書は字畫甚精なり。其十七史の北監板にして補版なき初印のもの亦妙なり。宋、遼、金、元の四史、初印好紙のものを佳とす。雜板舊板の刻本を收め淡めて一部とせるもの、其原印は南監本より勝ること多し。惟、毛氏の汲古閣十三經、十七史は校對草率にして錯誤甚多し。貴ぶに足らざるなり。

宋刻本の書籍傳へて今に留めしものには希世の寶
 こそんを其末に翻刻せざるもの翻刻し未だ完
 かくせしもの皆まじり跡をよき、さうま光片羽
 奇珍とてさるる有し望軒々しくまの心けんや
 宋刻の教行り蜀本太平本臨安書棚本書
 院芸長刻本仕仲精刻本各家社私刻本
 御刻本麻沙本茶陵本鹽茶本釋道二
 花刻本銅字刻本活字本其考えんさう活刻
 本の中うそい蜀本臨安本御刻本を最
 精しとす

又元藝宋刻本 明藝宋刻本あり 金遼刻本
 元初刻本として宋刻本と云ふものありしゆ初刻
 本と云刻本 金遼刻本と云ふものありし之を宋刻
 とくふものば稍遜るところあり
 而して蘇州の人明の濬本の蜀本明藝宋
 刻本 假刻本をもつて 序跋をこのまゝに、絶毛
 を染めて偽りて宋刻と云ふものあり 真と偽
 と乱雜す、辨せざる可らざる而して宋元の刻本
 素の辨を真と云ふとも元原印初刻の一二圖を
 自附せざるものも多しとす古人の宋刻を尊

い軽うしく塗抹せしが 後世の庸流候ふハ
 此類を愛惜することと ありて 妄りて自ら之
 筆を動くとも 塗抹す 意に應ひて 圈点し始
 めのふくも 終りのふくも 無きとの良し
 歎くことあり

宋刻本を鑑みたりしと 終る紙も羅紋墨
 氣文畫 行款 長澤字 單邊 末後卷數末
 行を刻むが、文入隨ひ行を隔て、二刻ある等
 のことを看みしし 又真本をもつて 對勘し
 して定む、項子京の蕉窓九録、世軍文船の注

秘録のことき宋刻を講究しと傳うん其大略を
挙げしとて又その處に又新刻の宋刻本を以
て其年月を去り紙色を染め或は旧紙を以て印
し宋刻を彷彿せしもの多し、もし果して南北
宋の刻をん、紙質羅紋ありて字畫圓
い、刻手古勁ありて雅なり墨氣香濃
し、紙色其潤なり卷を展ふれば便し人を
好むところの、ところなり、滑りわたり墨香紙潤
秀雅古勁ハ宋刻の妙を尽ししことハ
也

汲古閣の主人大小各種の宋刻史記一部を集め
名づけし百合錦史記といふ此を以て對勘
すんハ方に精詳なりと錯誤なきこと
元刻ハ點勘せりとも其字脚行款墨口一
見して便し知し、而して明の洪武永樂年
間刻しとる書ハ其は古きもの其以後の板
本至るまで更比古より及んたり沈人や明季
の刻本を甚敬し、南北監版を以て一
部の刻本初刻本欽定本各字刻本各
有梅

按等の官刻本に至り、又閩板、浙板、廣板、金陵板、太平板、蜀板、杭州刻本、河南刻本、延陵板、王板、袁板、樊板、錫安氏板、坊板、凌板、葛板、陳明卿板、內監版板、陳眉公板、胡文煥板、內府刻本、閔氏套板等ありて、悉くかぞふるあたはず。

たゞ王板翻刻宋本史記の類を最も精しとす。北監板、內府板、藩板は行款、字脚同じからず。袁板も亦精美にして、之を胡文煥、陳眉公の刻するところの書の多きに較ぶれば、及ばざるなり。各家私刻の書、亦善本の取るべきものあり。刻するところ好歹一ならざるのみなり。

稚川の凌氏と葛板とは錯誤無し。讀本となすべし。獨り、廣、浙、閩、金陵の刻本は最悪にして多し。陳明卿板、閔氏套板も亦平常なり。汲古閣毛氏の刻したるもの甚繁し。其中に好きもの僅に數種なり。

本朝(清)にて刻したるもの書にては御刻は精刻にして宋と並ぶべし。たゞ全唐詩は極めて精善なれども、惜むらくは校正猶未だ盡さざるものあり。

もし又外國にて刻したる書にては、高麗本最も好し。五經、四書、醫藥等の書、皆古本に従へり。凡そ中夏にて刻したるもの、向にみな字句脱落し、章數の全からざるものも、高麗にはなほ完全の善本を有す。

不問者得終活

七載

の四月十一日 好尚書

あつたてり方 終活

石の建前のもつた

開所式用とも思ふ

乙亥の月 月強

例の多め 終活

とくとも 急な三程の

新地を 試みるも

何の力古是は漸く市を成すを以て 踊り仕
但てぬか一と雪舟の喜山拾の作と師宣
しお七光三少首の鏡端有(摩之美人と
いふあかき足んく大なる藤心めし昔ら
ひらとあし大くの骨董美も廿か押しと
さよのよそ小規模さうく破天荒の言ふ
之積り候
砂川之の踊んくを真る大くの破天荒
天下版をまゝに刻むともさくとも心解る候
らめ保し 換局のしりあをらんともん

摩守原系朝臣長寛の墓に所を撰作する
公の事一應を刻すこと詳しうる事心とす
これらも一統冠文子の才ありあをせつて
唐大佐とすも入唐せし人又と原仲磨の
及此ゆを付候しとゆふし人元平氏の人也
墳墓よりいひ出遊してさしめつたんらうも
石と古物なうもよく保し申候ゆ
日比谷寺より伝へて徴するも古物公の墓
墓記とすこと概いさきの墓とす(長らくと
むらりけはきこと古物公の母の墓の事)

ゆめい織器を掘出しと新しうとす(墳墓
の世に柱式の供養も塔祀とす志而し
三朝帝師在大患去命公千百年忌塚」と刻し左
右の合と左に中華使船風着末官門日左に
文物器舟忠蛛絲有和助の字を刻すゆ
十一朝四月所斎の定建つる物也和「終
つて一村店より出し又古尾村よりくるゆ
に一時田一途より入まればゆきゆき終つて二
二の宮より初めし主人入すまら、主用候し
終つて後金回り余らうも今も候ゆする事

先が前の空地とるうを、尾巻山も
しり入る掛きし彼方こそ木下子文の
居るうしとて示さる又川が流る
一、二、三とさしとんそ掛の道丁さうと
ういふのは文書さうこそ
高橋うも阿んとは橋をさし
こゝのうとてさう一、二、三と
流るしとてさうのうとてさう
中川の橋が一、二、三と
甘くさうのうとてさうのうとて

川を流る川を流る川を流る
とてさうのうとてさうのうとて
秦川と流る川を流る川を流る
乙女と流る川を流る川を流る
名流る川を流る川を流る川を流る
此流る川を流る川を流る川を流る
族と流る川を流る川を流る川を流る
さう流る川を流る川を流る川を流る
さう流る川を流る川を流る川を流る
り移山亭記 へんさう 流る川を流る川を流る

同書刊行會

多前よりんをえしとをたてらるる家の割
 念ふ事うらむらんといふも并ぬひてある
 の排垂もよしく、島のあゝをたてるとも亦高き所
 の中士配の大きき石のりも、政を之を指
 して、後山亭の記あると此をたてると
 也と書さるる人、子をかき、うとて、まゝに
 びと、高城の殿、下り、自れをさう、いふ後
 して、政をたて、ある、高城の文と、誤い、主人歴
 史ぬき、ん、たて、んと、山物を記、中、史、論、を
 以つて、巧み、後山亭の事と、云さる、他の、又、人、記

と、こし、お、出、出、ぬ、と、か、と、威、服、す、者、も、上、出
 来、う、と、言、う、と、言、ふ、也、物、名、を、い、ふ、と、い、ふ、心、の
 高、う、も、指、山、亭、記、に、た、て、り、此、の、事、に、新、記、に
 きて、い、つ、た、り、あ、う、と、い、ふ、事、も、い、つ、た、り、を、出、し、事、
 前、よ、り、い、つ、た、り、と、い、ふ、事、も、い、つ、た、り、も、上、高、の、記、採、り、
 山、物、の、物、を、い、つ、た、り、と、い、ふ、事、も、い、つ、た、り、と、い、ふ、事、
 こと、此、の、根、え、ら、む、と、い、ふ、事、も、い、つ、た、り、と、い、ふ、事、
 こと、し、し、も、い、つ、た、り、と、い、ふ、事、も、い、つ、た、り、と、い、ふ、事、
 の、事、も、い、つ、た、り、と、い、ふ、事、も、い、つ、た、り、と、い、ふ、事、

山物書物史と書

一 半の御解延え帝改行

一 半の 歴代定お梅御講を教るの旨

二 半の御後あるも氣あはれの御

御後入るり作終り事歴を御

も御く改めをせぬとこそあことし

お終体の文章や作意をいとも書す

本体の御を改めよとて是くさぬ御

後御終りの御を改めよとて

山師古の御一書

香阿の御附外二三傳の文ぬる吉爾也

濃しとぬる山師の古爾御多入く御中

二三傳の古爾御も古文も御改め也

又二三傳の御も御改め也

せぬとぬる山師の御も御改め也

そととぬる御も御改め也

御改め也御も御改め也

いととぬる御の御改め也御改め也

いととぬる御の御改め也御改め也

いととぬる御の御改め也御改め也

いととぬる御の御改め也御改め也

いととぬる御の御改め也御改め也

岩庭石とさううな尤も通す大なる電燈柱の樹の川も
此れうしてまつちも平地の下に所存の敷設のしるべき地
このほかに特になつて所とす北園在、あつた本宅を距
る三三丁目のさうなうり市街を離れさる地であつた、而
も園の結構めは自らとうつし宛らう人として別天地
になつたと思ふべきであらう、主人余の爲め、特に唐生花
の盛衰を法ふ、あつたの子弟家宰、身居るに於て余
あつたの酒家、さうもあつた、おりの、おりの、林、酒、一、
張り、酒、を、辞、する、も、本、意、を、あ、つ、た、う、今、日、を、持、て、禁
戒、を、破、る、方、を、先、け、し、酒、杯、を、あ、つ、た、あ、つ、た、う、ま、い、に、
幾、回、う、謝、さ、る、余、も、圓、う、り、杯、を、重、ぬ、郷、情、懐、か、め、し
美、殊、な、舌、を、舌、う、り、さ、す、周、思、さ、る、北、宅、の、鮎、津、
西、東、と、す、る、所、を、あ、つ、た、北、宅、前、の、池、う、り、る、者、と、さ、る、
既、に、試、さ、る、味、う、り、肉、滑、う、り、さ、る、肉、し、ま、う、り、て、賦、脂

温の肉、固く、白也、卵、卵、も、又、甚、好、也、是、今、之、鮎、の、放
卵、前、を、た、か、滋味、う、り、時、特、に、金、山、鮎、と、呼、ぶ、と、さ、る、ま、酒、を
嗜、む、か、酒、の、也、選、も、古、に、精、也、余、の、禁、戒、を、破、る、に、傷
む、も、あ、つ、た、也、前、余、う、り、書、画、味、あ、つ、た、と、珍、重、さ、る、も、
と、其、書、画、の、幅、を、求、れ、多、く、出、し、示、さ、る、時、既、に、相、陰
に、属、し、親、を、不、便、也、の、相、え、ん、こ、と、を、求、め、北、宅、僅、に、
二、三、と、見、る、其、幅、も、寛、富、う、り、海、傍、う、り、山、物、を、え、る、も、
海、傍、の、幅、も、幅、一、丈、三、尺、に、七、尺、也、丈、け、之、を、通、す、大、板
あり、し、圓、も、か、つ、た、大、床、間、に、之、を、掲、げ、る、は、
恰、當、う、り、る、巨、幅、也、山、麓、下、の、波、上、に、懸、る、下、り、ん、
に、圓、も、三、三、の、傑、也、初、め、し、海、傍、の、丸、平、の、あ、つ、た、と、
を、知、ら、ず、寛、富、を、梅、の、枝、幹、と、交、錯、う、り、圓、を、水
墨、も、こ、の、し、り、と、う、り、長、丈、幅、う、り、拵、投、の、交、錯
め、る、も、板、う、り、る、ん、縁、う、り、脈、絡、を、過、ら、す、所

此書ありとつらく感入るるを以て西秋九月九日
 前二日畫于亮川舟中既停雲樓中 物家此米米と
 あり梅竹二幅一と 古より流毒本泥梅竹
 集なるるを以て此書ありと云ふ者ありしは之を横軸
 墨梅とて名するは殊味ありしもの賞心寡人と云き
 ありと稱し之を論也 題詞云於後居信真面目
 持現未梅美人の梅尾と云ふも 外田山舟双梅山
 師海史双梅一と印 寂山懐中舟的一と印 寂山
 世(五律) 陽多あるるを以て之の此節を以て三
 論と作四と云ふと云ふ二家の古画殊に之を以て
 なるも故味を以てする所の三つを以て即ち之を
 す 容希七絶を以て之の三つを以て即ち之を以て
 山のり上と云ふ 淑賢と稱ししは之を以て 此外十五

つと云ふと云ふと山師古画名家古画山師古
 画帳梅道の梅經冊オと云ふし之の余の古画
 是と銘あり除後録を以て之を以て之を以て
 之の海入と云ふ 雜録 此の古画眼と云
 利し中と云ふと云ふ 如女は之を以て之を以て
 勢き後之と云ふと云ふ 書の高二三と云ふし
 鑑定と云ふと云ふ 余の眼 此の古画
 之を以て之の梅伊お介の古画と云ふと云ふ
 し

右田山學校歌奉和の心也書寫し山功
生所代手邦世追慕先生希結、近行
学之跳盪因法而其方其而自乃在起端
亮而法度精意也此書最可尊重也

春城白夜節打遊口口

臨己事也山平甚淺し七美院の巻と多し二
我に取むさるを甚淡美と云し此の書及
故不痛ハが愛入集るの術之字も此の
又曰く余妙を也、此山功の印とアト
し其の心も抄改と云く時抄しと云ふ

修己を印と改し抄しと云ふ
しとあしと云ふ(抄ををとあしと云ふ
その心)抄改しと云ふ
ハもさうあしと云ふの印を注しと云ふ
と云ふ、且く抄くを云ふと云ふ

春城又記 紙写を再查するに美(原紙)

二あるを三有を其の抄目ハ
キリと取しその所を云ふ
し、以て前記の誤を正すと云ふ

の世に名家信の端を在るは其の端たるに
 阿も高ら子供おと満山ノル下ハシリと出
 けく所拾うも火災如きう松風ノ端はえ
 し高らく火と八方ノ橋うう行く光景をハ
 供おとルナハシリの高きう如くも又おしえ
 七高きくそのの輪を被新る道：主退き海
 州に國ノ指し立たる中うと花魁のカード
 リを高らくも交うとく此の異状の形を又
 うるまめとくうと花魁と見えしす一〇七
 きこのうとあつ物具とをきまらうとあつ
 けつ

と見ても又つて聞ひたすも一冊ううしと見え



是れは高梁川改修工事に直接關係なきも、淺口郡上成部落に在りて此墓邊のみ獨り存在するもの且つ此墓標は是れ神史小説又は演劇に於て多く見る依客一寸徳兵衛の墓なれば特に其序を以て撮影せり

以下全て

白紙

